

## ミキ伝説の始まり

田 辺 健 二

九十二歳一か月という、生きるだけでも稀な長寿を全うされた武田ミキ前学長は、亡くなる一年前の九十一歳まで、現役の学長職を立派に務められたという。まことに見事な御生涯であった。ミキ先生の座右銘「教育に生き、教育に死する信念」そのままの人生であった。文字通り一心不乱に日本の女子教育に捧げた一生は、武田学園の創立者たるにふさわしい生涯であった。

アメリカ第十六代大統領リンカーンが凶弾に倒れた時、詩人ホイットマンは、その死を悼んで、「おお船長！私の船長！」と歌った。私は今それを思い出している。武田ミキ先生もまた、武田学園丸の船長であった。もう一つの座右銘「為せば成る」の旗を船首に掲げて時化や難所の海を、闇夜の中突き進んで行った不撓不屈の魂は、後に続く乗組員たちに勇気と団結心を与えた。一等航海士ともいべき横山邦治教授との名コンビによって、武田学園

一、大学人としてともに生きて

を今日の総合学園にまで発展させたその情熱は、後に続く者にとつての明るい導きの灯となるに違いない。

武田ミキ先生に私が始めてお目にかかったのは、昭和四十七年の三月であつた。ミキ先生が終生執務された学長室で、横山教授にご紹介していただいた。「田辺君は桃色でして……」という横山教授の言葉に私自身がびっくりしたが、「アカというほどではないですがね」という補足説明で、ああそういうことかと一応理解できたが、いささか人騒がせな紹介ではあつた。そのせいかどうか、その後何度かミキ学長に「先生はウチの建学の精神とは違ふお考えのようですが……」と言われた。もつとも、当時の私が、六十九年の大学闘争の中から出て来て、生意気なことばかり言つていたからであろうが。たとえば、「桜の花が咲くのも散るのも気がつかないなどというのは自慢にはなりません。」「なまじ信念などというものは持たない方がよいのです。」「学長の訓話は格言ばかり並べても駄目です。もつと具体的に話さなければ。」「反対意見こそ尊重しなければいけません。」「等々。今思い出してみると、若さ故の生意気とはいつても、よくもまあ言つたものだ、今さらながら汗顔の至りである。しかし、そんな生意気な私ではあつたが、その後次第にミキ先生にも可愛がられて、広島文教女子大学から転出する時には、「定年になつたらまた帰つて来て、手伝つて下さいね。」「とおっしゃつて下さつた。それを思い出すと今も胸があつくなる。学長から仮りにもこういう言葉をかけてもらえる教員は幸せである。

ミキ先生には驚かされるが多かつた。たとえば、睡眠は三、四時間だということ、毎日のように深夜まで学長室で執務していること、住まいも食事も服装も本当に質素で「いつも掃除のおばさんに間違えられます。」「とおっしゃつていたこと、病気で倒れた時職員室にベッドを持ち込んで陣頭指揮をとつたこと、節約をモットーにして封筒を裏返しにして使うほどなのに毎年のように新校舎を建設したこと、学生がトラブルを起こして警察から連絡が

あると真つ先に飛び出して行ったこと等々。これらは、ミキ先生が本当に教育に全身全霊、人生のすべてを打ち込んでおられたことの証左であろう。こんなことは、私は勿論、普通の人間には仲々真似のできることでない。宗教の開祖や、大企業の創業者には、そのような稀な人格を持った人が多い。それはやはり天才と言ってもよい才能であろう。その超人的な魂が、周囲の人や後に続く者を奮い立たせて大業をなすに至るのである。それはしばしば伝説や神話になりうる。武田ミキ先生もそのような人である。しかし、そういう大業を成した人の陰には、必ずそれを支え発展させる有能な別の人がいるものである。そういう人を得た時、大業は始めて成るのである。武田学園にもそういう人々が存在するはずである。率先垂範、陣頭指揮をとる武田ミキ先生がいなくなられた今、武田学園は新しい世紀に入った。ミキ精神を受け継ぎ発展させる新しい指導者のもと、一致団結して前進してほしいものである。

ミキ先生に最後にお目にかかったのは、平成二年三月二十三日、ある公用で久し振りに広島文教女子大学へ行った時であった。その時ミキ先生は、「先生からいただいたたいたテーブルは有難く使わせていただきますよ。」とおっしゃった。そのテーブルとは、私が転出する際、処分に困っていたいた所のテーブルを、ミキ先生に引き取ってもらったものであった。学長室の隣りの室にそのテーブルは置かれて使われていた。転出する記念に新しいテーブルを残して行ったのならともかく、私の家で使い古したテーブルを、このように大事に使っていて下さるのを見て、私はただただ恐縮したのであった。